

2016年2月7日変容主日（顕現節最終主日）

福音書 ルカ 9:28-36

第一の日課 II コリント 4:1-6

第二の日課 申命記 34:1-12

祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。

ルカによる福音書 9:29

ねらい

十字架の出来事は、人の目には悲しく辛く、敗北に見えることです。しかし、神には人の罪を贖うためにどうしても欠かせない出来事でした。輝く姿を通して、これから起こる出来事は神様のご計画なのだと、三人の弟子に教えておられるのです。

ですから、私たちがなすべきことは、私たちの知識や思いを基準に理解しようとしないで、起こっていることの中に、神様の思いを聞くことでしょうし、それによって御心を理解していくことができるのでしょ

説教作成のヒント

輝く姿を想像することは楽しいことです。それとは反対に、十字架につけられたイエス様を見詰めるのは辛いことです。目に見えることに心を寄せてしまうと、何が大切なことなのかを見失ってしまいます。神様は「これに聞け」と言われます。イエス様の言葉を聞き、従うことを大切にできる私たちになりたいものです。

豆知識

イエスがモーセとエリヤと話しておられたのは「最期」のことだと記されています。この言葉は「エクソドス」という言葉で、出エジプトも「エクソドス」と言いますから、奴隷からの解放であった出エジプトに重ねると、罪の奴隷からの解放が十字架の出来事なのだと理解できます。

12人の弟子たちの中で、イエス様は時折、ペトロ・ヨハネ・ヤコブの三人だけを選び出されます。会堂長やイロの娘を癒す時(ルカ 8:51)もそうでしたから、この三人が特別な位置を占めていたことが分かります。三人だけが呼ばれた時には、彼らも特別な気持ちで従っていたら

うことは容易に想像できます。
雲は神様の栄光が臨在するものと示唆されています。出エジプトの際に、脱出した民を雲の柱・火の柱が守ったことから明らかです。

説教

「お祈りに行くので、今日は一緒に行こう」とイエス様がペトロさん、ヨハネさん、ヤコブさんを誘いました。少し前の日、イエス様は十字架につけられて死んでしまうとおっしゃったので、ペトロさんたちはとても悲しんでいました。そのイエス様が今日はお祈りに誘ってくださったのです。何かを教えたい時、また特別な時にはいつも自分たち三人を誘ってくださることも知っていましたので、悲しい気持ちも残っていたのですが、「今日は何かあるんだな」と少し元気を取り戻し、イエス様の後をついていきました。

イエス様に連れられて行ったところは高い山の上でした。しばらくお祈りをしていると、目を閉じていても分かるくらいに周りが明るくなったのです。ペトロさんが驚いて目を開けると、イエス様の服が真っ白に輝いていました。そればかりではありません。二人の人が突然現れて、イエス様とお話しをしているのです。あの二人は誰で、一体どこから来たのでしょうか。後でイエス様に伺うと、モーセさんとエリヤさんでした。

さて三人はどんなことを話していたのでしょうか。ペトロさんには分かりませんでしたが、光に包まれた三人の姿をみているだけで、とても嬉しい気持ちになりました。イエス様の悲しいお話も忘れて、「今日も素敵なことに出会えた」とペトロさんは思いました。でも

二人の人が帰ろうとするので、ペトロさんはもう少し見ていたいと思い、「ここに三人のためのお家を造ります」と思わず言ってしまいました。

その時です、雲の中から「お家は必要ありません。イエス様のお言葉を大切にしてください。」と声が聞こえてきました。ペトロさんは「大切なことは、イエス様のおっしゃることを聞くことなんだ」と分かりましたので、あの悲しい話も、実は大切なこと、素晴らしいことなのだと分かりました。そして辺りを見回すと、もう二人の人はいませんでしたが、イエス様は服だけでなく顔も光り輝いていました。

嬉しい気持ちを頂いたペトロさんたちでしたが、周りの人にこのことを話しませんでした。だってとても不思議なことでしたから。

さんびしよう

□1 番 「みんなでたたえましょう」

□改訂版 8 番 「みんなでたたえましょう」

やってみよう

☆イエスさまが白く輝かれた山を再現してみよう。

ペープサートで、登場人物をつくります。

表と裏に絵が描けるように。

イエスさま 表：普通の姿 裏：真っ白に輝く姿

ペトロ 表：寝ている 裏：驚いている

ヤコブ 表：寝ている 裏：驚いている

ヨハネ 表：寝ている 裏：驚いている

モーセ 表：笑顔 裏：十戒を持った姿

エリヤ 表：笑顔 裏：預言の書を持った姿

ペープサートをつかって、その場を再現してみましょう。

ペトロさんが言った言葉はなにだったでしょうか。

また、最後に神様が告げられた言葉へと話しがつながるようにしましょう。

はなそう

- ・なぜイエス様は白く輝かれたのだろう
- ・モーセとエリヤさんと何を話していたのだろう。
- ・お弟子さんたちはどうして寝ていたのだろう。
- ・ルカによる福音書には神様の声は何回聞こえてくるだろう。それはいつ？どこにある？

2016 年 2 月 14 日 四旬節第 1 主日

福音書 **ルカ 4:1-13**

第一の日課 **ローマ 10:8b-13**

第二の日課 **申命記 26:5-11**

悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

ルカ 4 : 13

ねらい

荒野の誘惑と言われる箇所です。救いにとって、荒野で誘惑を受けるという過程は大切なことでした。なぜなら、神の救いの出来事が既に「出エジプト」として起こっていたからです。あの出来事後、イスラエルは再び罪を犯し、国の崩壊を招きました。今、新たな救いの出来事が起こるとすれば、出エジプトの出来事をもう一度経験し、それを乗り越える必要があるのです。だから、主イエスが救いのために、荒野での日々を過ごされたのです。イエスは荒野に、人間の罪を負って向かわれたのです。

説教作成のヒント

「40」という数字がカギになっています。出エジプトの時に荒野で過ごしたのが40年、モーセが十戒をもらうために山に登ったが、山に居たのは40日40夜です。40年は一世代の終わりでもあります。

誘惑の中身は、キリストの三職「預言者」「祭司」「王」に対応する誘惑です。パンの誘惑は預言者の言葉を勝手に用いる誘惑になっています。すべてを見せて跪けという誘惑は、王の支配に対する誘惑です。飛び降りろというのは、捧げものに対する誘惑になっています。これらのすべてを、神の言葉で応答されていることを心を止めたいものです。

豆知識

荒野に行くというのは、「罪を負わせた雄山羊」に関する律法と関連しています。「こうして至聖所、臨在の幕屋および祭壇のために贖いの儀式を済ますと、生かしておいた雄山羊を引いて来させ、アロンはこの生きている雄山羊の頭に両手を置いて、イスラエルの人々のすべての罪責と背きと罪とを告白し、これらすべてを雄山羊の頭に移し、人に引かせて荒野の奥へ追いやる。雄山羊は彼らのすべての罪責を負って無人の地に行く。雄山羊は荒れ野に追いやられる。」(レビ 16:20~22)つまり、単に荒野に行かれたというのではなく、罪を負って荒れ野に行かれたということなのです。

「説教」

そこには体を休めるような草原ありませんでした。そこには太陽の光をさえぎってくれる木陰もありませんでした。そこには水もなく食べ物もありませんでした。そこにあったのは、乾いた砂地とゴロゴロした岩。そこを人は「荒野」と呼びました。迷い込んだら命すら亡くなってしまうこともあるのですから、誰も近寄ろうとはしませんでした。悪魔がイエス様を連れていったのは、そんな「荒野」の中でした。イエス様は40日もの間、荒野の中におられたのです。その間、何も食べず、何も飲まずに！どうしてそんなことをなさったのでしょうか。

ずっと昔、イスラエルの人たちも荒野の中にいました。エジプトという国で長い間、奴隷になっていたのですが、神様が助けてくださり、故郷（ふるさと）に帰れることになりました。でも途中で神様のお言葉を守れなかったのが、荒野に40年間も過ごすことになったのです。辛くて苦しい生活だったでしょう。イエス様が荒野に40日間いたのは、昔の人々の苦しみを経験するためだったのかもしれない。

さて、40日という長い日が過ぎて、悪魔がやってきました。「お腹が空いただろう。お前には素晴らしい力があるから、ここにある石をパンに変えて食べたら良いじゃないか。」イエス様は、食べ物は神様がくださることを知っていましたので、「神様がくださるパンと神様のお言葉で人は生きているのです。」とお応えになりました。

悪魔は次に、高い山の上にイエス様を連れて行きました。悪魔が辺りを指差すと、あっという間に世界中が見え、悪魔は言いました、「どうだ、素晴らしい世界だろう。これをお前にあげよう、俺にひざまずいてくれたらな。」イエス様は神様が働いてくださる国の素晴らしさをご存知でしたので、悪魔の言葉を受け入れず、「神様の国にお仕えすることがいちばん素晴らしいことです。」とお応えになりました。

高い山から降りて、悪魔は神殿のある町、エルサレムにイエス様を連れて行きました。神殿の屋根に立たせて言うのです、「ほら、見てごらん、あんなに沢山の人が神様に捧げものをもってやって来る。お前も神様に自分をささげてみたらどうだ。ここから飛び降りてお前自身をささげたら、神様が受け止めて救ってくれるだろうさ。」イエス様は「神様の言葉を信じることで、これが神様に捧げする大切なものです。神様はいつも助けてくださいますから、試したりすることは必要ありません。」とお応えになりました。

イエス様は悪魔の誘いにも、聖書のお言葉で全てお応えになりました。聖書の言葉は今も、私たちを守ってくれるのです。

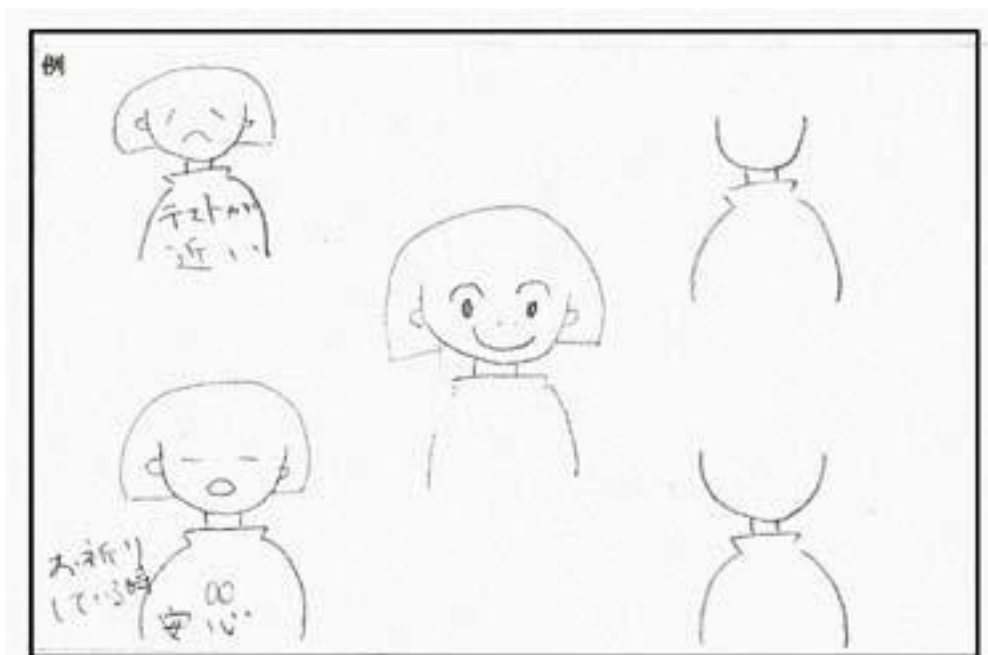
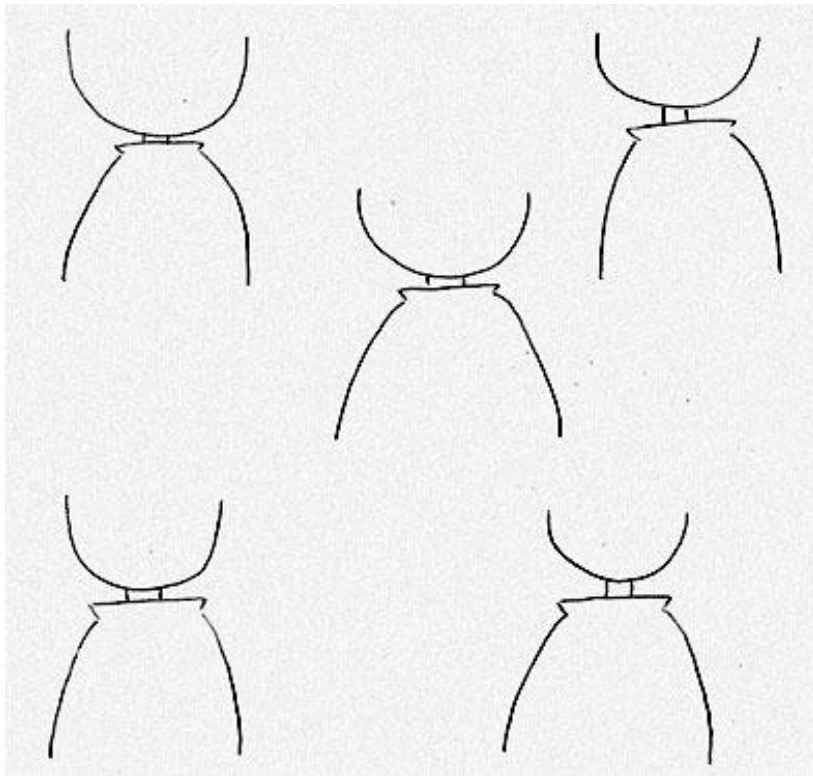
さんびしよう

□36番 「しゅイエスのみちを」

□改訂版51番 「おそいくるライオン」

やってみよう

☆自分の中のいろんな自分



感想を自由に書いてみよう

* 2〜3週間後に見直してみるのもいいでしょう

最近の自分をふり返ってみましょう。イライラしている自分やお友達に優しくしている自分。おいしいものを食べて、ニコニコしている自分。いじわるをしてしまって、あとで後悔をしてしまうこともあるかもしれません。1人の中には、いろんな自分がいます。どんな自分がいたのか、ふり返りながら、どんな時でもどんな自分がいる時でも神様がそばにいてくださることを感じましょう。

2016年2月21日 四旬節第2主日

福音書 ルカ 18:31-43

第一の日課 フィリピ 3:17-4:1

第二の日課 エレミヤ 26:7-19

「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」

ルカ 18 : 42

ねらい

三度目の十字架と復活の予言をなされた後、いよいよエルサレムに向かう歩みが始まります。人々の高揚感は一時的なものでした。しかしイエス様はそれをすべて受け止めてくださり、粛々とエルサレムへ向かわれます。盲人の癒しの出来事がエルサレムへ向かう途上に記されていることは、罪の赦しと解放が背後に意図されていますが、そのことに対する人々の無理解が、盲人の姿に投影されているのかもしれません。盲人の「信仰があなたを救った」というイエスの言葉を通して、目が見えるようになったという喜びだけでなく、従うべき方は誰であるかを彼は知ったということを伝えられたらと思います。

説教作成のポイント

人々はまるで凱旋するような気分でエルサレムへ向かいます。人のためにエルサレムへ向かわれたイエスと、自分の救いのためにエルサレムへ向かうイエスについて行った人々との対照的な姿が描かれています。盲人に対する見方も同じで、人々には道端に座る盲人のことなど目に留まらなかったのですが、イエスはその人に目を留めてくださったということでもあります。敢えて目の見えない人に「何をしてほしいのか」と尋ねることによって、人々が無視してしまった人の存在を知らしめようとしておられるののかもしれません。盲人の気持ちにも寄り添いたいと思い、説教を作りました。子どもたちに聞いてもらいた

めに、目が見えないということの辛さが伝われば、救われた喜びも分かってもらえるでしょう。

豆知識

エリコからエルサレムまでは10キロほどの道のりです。途中には山間部もありますので、盗賊も襲うような道だったと思われます。もしかしたら、良きサマリア人の譬えの舞台も、このエリコからエルサレムの道程であったかもしれません。

盲人が叫ぶという言葉は2回出てきます。38節の叫ぶ（ボアオー）は自分の感情から出てくる叫びです。39節の叫ぶ（クラゾー）は本能的に出てくる叫びです。この機会を逃したら、二度とダビデの子に会えないと本能的に察し、叫び声を上げたということでしょう。子どもたちにお話をする際に、声の大きさを変えることでその意味が伝わるかもしれません。

説教

エリコという町に、一人の目の見えない人がいました。目が見えないので、いつも道端に座っていました。通り過ぎる人の中には、その人のことを可哀想に思い、目の前に置かれた入れ物の中に、わずかなお金を入れてくれる人もいました。中には、食べ物をくれる人もありましたし、そうやって過ごすのが、目の見えない人の毎日でした。

その人が座っていた道は、エルサレムという大きな町に繋がっていました。エルサレムには神様に捧げものをする特別な場所、神殿がありました。いろんな人が、お話しをしながら通って行きます。「今日は赤ちゃんが生まれたから、神様にお礼の捧げものをするんだ」

「今年はたくさんのがとれたから、神様に感謝をしに行くんだ」などなどと話す声が、道端に座っている目の見えない人に聞こえていました。そんな話をたくさん聞いていたので、その人も一度はエルサレムの神殿に行ってみたいと思っていました。でも、誰も連れて行ってくれる人はいませんでした。

何年も何年もそうやって道端に座って過ごしていましたが、ある時、「イエス」という人のことをたくさん聞くようになりました。神様のお話しをしてくれる人で、病気を治してくれたこともあるのです。何よりも、「昔から聞いていた救い主ではないか」と通り過ぎる人たちが言うのも聞こえてきました。それなので「もし、その人に私も触れてもらったら、目が見えるようになるのではないだろうか、いや、きっと見えるようになる違いない。」と、目の見えない人は思うようになっていました。

そしてついにその日がやってきました。その日は、いつもと違って大勢の人がやってきたのです。「エルサレムに行くぞ」と誰もが叫んでいます。いつもは通り過ぎる人たちはのんびり歩くのに、今日だけは押し合いながら歩いているのが聞こえます。「一体、何があるんですか？」と前を通り過ぎる人に聞いてみましたが、だれも応えてくれませんでした。「一体、何があるんですか？」何度も何度も聞き、ついに「一体、何があるんですか？」と叫んだとき、「イエス様がお通りになるんだよ」と、やっと一人の人が教えてくれました。

イエス様！！、そう聞いた瞬間、目の見えない人は叫んでいました、「ダビデの子、イエス様、私を憐れんでください、助けてください」と。余りにも大きな声に、そこにいた人たちはびっくりしました。それだけでなく、「うるさい！」と黙らせようとしたのです。でも、その人は必至でした。だってもしイエス様が来てくださったら、道端に座るだけの辛い毎日を過ごさなくても良いかもしれないのですから。だからますます大きな声を出して叫びました、「ダビデの子、イエス様、私をあわれんでください、助けてください」と。すると、だれかが近くにやって来て、「主がお呼びだ、こちらへ来なさい」と手を掴んで連れて行ってくれたのです。

とうとうイエス様にお会いできました。見えるようにしてくださり、「あなたの信仰があなたを救ったのです」とイエス様は声を掛けてくださいました。目の見えなかった人は、今は見るができるようになりました。神様に感謝し、エルサレムに向かうイエス様と大勢の人たちについて行きました。いつかは行きたいと願ったエルサレムなのですから、嬉

しかったことでしょう。でもそこは、イエス様が十字架につけられる所なのだと、大勢の人々も、そして、今、目が見えるようにしてもらった人も、思いもしなかった所なのです・・・。

さんびしよう

□57番 「しゅよわたしをあわれみ」

□改訂版27番 「キリエ・エレイソン」

やってみよう

＊広い場所や外でやるプログラムです＊

目が見えなくても、仲間を信じて行動することを体験してみましょう。

(本来のネイチャーゲームの目的とははずれます)

☆コウモリとガ

①まず、輪を作りましょう。(10人程度)

②その中で、コウモリ1名とガ2～4名決めます。

③コウモリとガは、輪の中に入ります。この時、コウモリは目隠しをします。

④周りの輪の人は手をつないで壁を作ります。

⑤コウモリは「バット」と叫び、ガはそれにこたえて「モス」と叫びます。コウモリは「モス」の声をたよりにガを捕まえます。タッチされたガは、壁になり、何回か交替します。

☆目隠しいもむし

①5人くらいのグループを作ります

②1人以外は、目隠しをします。

③1列にならび、前の人肩に手をあて“いもむし”になります。

④先頭に目隠しをしていない人が立ち、手を取り探検にでかけましょう。＊列が乱れないように前や後ろの人とペースを合わせて歩きましょう。

はなそう

今日の説教にあるように、バルティマイさんは必死にイエス様に対して叫んでいました。目が見えないので、どこにいるかもわからなかったことでしょう。

気付いてくれなかったら？無視されたら？とちょっと不安はあったかもしれないけれど、信じて一生懸命叫びました。

2016年2月28日 四旬節第3主日

福音書 ルカ 13:1～9

第一の日課 I コリント 10:1～13

第二の日課 出エジプト 3:1～15

「御主人様、今年もこのままにしておいてください。」

ルカによる福音書 13章8節

ねらい

四旬節第三主日の礼拝になります。ガリラヤから来た人々がピラトに殺害され、その血を生贄の血に混ぜて汚したということ、シロアムの塔が倒れて18人が死んだことなどを、死んだ人自身の罪の故なのだと人々が批判することに、イエスは「違う」と言っておられるのです。神様の前にあっては、人は全て罪人です。なぜなら、神様を忘れて生きているからです。そのような人間に、神様は見捨てることなく寄り添ってくださっています。日課の園丁の姿を通してそのことが言われています。

説教作成のポイント

自分のことを考えてみましょう。他人を批判しながら自分はそうではないと安全な所に身を置いている自分がいます。イエス様は全ての人は同じですと批判する人々に語っておられるのです。すべての人は罪人、だから全ての人を神様は救いたいのだということを大事にしたいものです。

園丁の丁寧な世話は、一人ひとりに違った世話をしているということを意味しています。「みんな違って、みんな良い」ということを、しっかりと伝えられたら素晴らしいと思います。

豆知識

ローマ皇帝ティベリウスの下でポンテオ・ピラトは第五代ユダヤ総督とされ、後にイエスに死刑判決をくだします。その時代にピラトがガリラヤ人たちを殺害し、その血が生贄として捧げられた動物の血に混ざったにも関わらず、そのまま捧げてしまったということの意味していると思われます。何故このことが問題とされたのかということですが、血が混ざったままということでガリラヤ人を動物と同じに扱ったということの問題にしたということではないかということでしょう。

ブドウ園の主人なのに対象がイチジクの木になっています。ブドウ園はイスラエルを示しています。イチジクも身近な植物です。アダムとイブが罪を犯して恥ずかしくなり、身を隠したのが「イチジクの葉」だった(創世記 3:7)ということからも理解できます。そういえば、ザアカイがイエスを見るために上っていた木は「いちじく桑」でした。普通のイチジクと理解して良いだろうと思います。イチジクは身近で重要な木です。個々の存在について語るために、敢えてブドウ園のイチジクを対象にしたのではないかと思います。その辺りの事情は、想像を膨らませられる要素かもしれません。

イスラエルの律法では、全ての実のなる木は、実が成り始めてから3年間は収穫してはならないとなっています。4年目は神様に捧げ、5年目になってやっと食したり商品にしたりできたのです。(レビ 19:23～25) 3年も実が成らなかったというのは、もし来年実がなったとしても、商品になったり食用になるのは5年先という意味がありますので、持ち主が短気な性格だったというには当たりません。

説教

広いブドウ園がありました。そこには、1本、2本、3本、4本・・・とても数え切れないほどのブドウの木がありました。たくさんのブドウの木の間には、これもまたたくさんのイチジクの木がありました。ブドウの木を支え、暑い日にブドウ園で働く人が木陰で休むためでした。収穫の季節になると、ブドウやイチジクの木にはたくさんの実が成りました。持ち主は遠くにいて、実ったところに見にくるだけでしたから、たくさんの実がなるように丁寧にお世話をしたのは園丁と呼ばれる人でした。水をやり、伸びすぎた枝を切り、虫に葉っぱを食べられないようにしなければいけませんし、木の周りの雑草も抜かなければなりません。実が成るまで、少しも気が抜けません。いえいえ実が成り始めても同じです、熟してくると今度は空から鳥が食べにやってくるので、せっかくの実を鳥に食べられないようにしなければなりません。ですからいつも仕事はたくさんありましたが、園丁は一本一本を大切に手入れしていましたので、このブドウ園ではたくさんの木に実が成っていたのです。

ブドウ園の持ち主は、収穫の季節になるとやってきます。いつもたくさんの実が成るので満足して帰っていきます。ある年も持ち主がやってきました。いつものようにたくさんの実が成ったのでとてもニコニコしていました。ところが一本のイチジクの木の前に来た時、曾木を見上げながら「ほかの木に実が成っているのに、この木にはずっと実を成らせていない。大事な土地だ、切り倒してしまいなさい」と園丁に命令しました。ところが園丁は、「どうか切り倒さないで、もう少し世話をさせてください。肥料が足りないのかもしれない

せん。」とお願いしました。持ち主は、もちろん園丁を信頼していましたので、切り倒さずに「もう少し待ちましょう」と言ってくれたのです。実を成らすことができなかったイチジクの木も、きっと嬉しかったでしょうね。

さんびしょう

＊讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□90番 「うたいましょう」

□改訂版126番 「うたいましょう」

やってみよう

イチジクは世界で一番古くからある果物かもしれないことがわかってきました。

挿し木で増えるため、栽培が簡単だそうです。

※許される環境にあるなら、イースター（春）に向けプランターなどに花の種を蒔いたり、挿し木をする。

※（イースターの準備）お花や果物の絵をたくさん描き切り抜く。イースターまでストックしておく（イースターにみんなで飾る）。

はなそう

□「罪を犯す」とはどんなことをしてしまうことでしょうか。